私の戦争体験

M.E.　1950年　福岡県小倉生まれ♂
昭和 25 年 1 月生まれ、団塊最後の年代。当初原爆の目標となっていた小倉で育つ。長崎が小倉の身代わりになったことに不思議な因縁を感じる。生死を分ける事件とすれ違いながらも、その度に僥倖を得て平穏･平凡な人生を送っている。ここぞと言うときに神頼みをしていた成果が現れたものと、深い感謝の念を時々捧げる敬虔な神道の信者。

私の祖父は佐賀の久保田村（現佐賀市）にある香椎神社で神主をしていた。父はそこで四男として大正7年（1918年）に生まれている。当時、香椎神社は「村社」の格であったらしく、これを「県社」に格上げすべく奔走したがうまく行かなかったようで、その失敗により祖父は長崎に遁走している。大正の終わり頃のことと思われる。
どういう経緯かわからないが、祖父はその後長崎で坂本にある山王神社の宮司となり、昭和8年に52で亡くなっている。父の兄である長男は左傾したインテリだったようで、特高に踏み込まれたこともあったらしいが、息子たちが神主を継ぐことはなく、以来私の一族は神官とは縁がなくなった。

子供が7～8人で幹周りを囲むほど大きな楠が境内にあることなど、父から山王神社のことを何度も聞かされていたが、初めて山王神社を訪れたのは昭和43年夏、私が浪人中18のときである。原爆で石の鳥居の片足が倒れたものの、今なお片足で佇立し続けているという話しは聞いていたが、それまで写真を見ることもなくどのような姿かについて明確なイメージは持っていなかった。

件の鳥居は参道である階段を上がったところにあって、更に境内までは数十メートルほど公道が続いており、階段を含めた参道の周辺は民家が建ち並んでいる。階段下に立ってその鳥居を初めて見たときは足のすくむような恐怖を感じた。真夏の太陽の下、花崗岩でできた白い鳥居のいかにもアンバランスな構造が、あの日以来20年以上の時を経てそのまま残っていることに厳かな奇跡を感じたと言ってもいい。

片足の鳥居を凝視したまま、階段を上がりきると、倒れたままのもう1本の足とその上に載っていたはずの笠木などが、たった今倒れたかのようにそのままの形で無造作に投げ出されていた。公道とはいえ、階段につながる参道で、車の往来のために片付ける必要がなかったのでそのままになっていたらしい。一本足となった鳥居の由来を表示する標札もなく、見せ物となることを拒んでいる姿に一人肯んじたものだった。

数年前に再度訪ねた折には、横倒しとなった片足はすでに道の脇に片付けられ、説明版が立っていた。歴史的価値からみれば、無意味な人為で時代の証言力を貶めたも同然の措置であるように思われた。神主さんの話によれば、かって市から邪魔だから撤去せよと命じられたが、費用が多額なため断念させたという経緯があったらしい。こんな市の姿勢では、危険だから一本足も撤去せよと言われたこともあったのではないだろうか。

鳥居の足の周りには寄進者の名前が彫られていたのだが、爆心地からわずか800メートルに位置するこの鳥居が原爆の光線に晒された側では彫り物の跡は消え失せ、石すらも焼けただれた当時の様子をそのままに物語っている。宮司さん一家は防空壕の中で被災されたものの、原爆を乗り越えて生き残っておられるが、付近の住民は家も含め跡形もなく全滅されたと言うことだ。

戦後米軍が撮った写真の中に、瓦礫の街となった市内の向こうに片足の鳥居とすべての葉を失った大楠が写っており、戦後長い間市民はこの鳥居を遠目に見ながら復興に勤しんだに違いない。大楠は20年以上葉をつけず、枯死したものと思われていたが、人々の努力で近年再び以前の姿を取り戻している。

香椎神社　http://furusato.sagafan.jp/e66099.html
山王神社　http://www.sannou-jinjya.jp/